

学校の共通目標

授業作り	重 点	○教材研究を通して児童の「意欲を高める」「理解を深める」授業を行う。基礎的・基本的な学力を土台とし、主体的・対話的な授業を充実する。	最 終 評 価	
環境作り		○ICT機器を効果的に活用し、児童の驚きや発見を導き、理解を深める。ICT機器・板書のそれぞれの利点を生かす。ユニバーサルデザインの視点から特に教室前面を重点に整備する。		

学年の取組内容

学年	教科	令和元年度の定着度調査（1学年を除く）や6月以降の学習状況に基づく分析	学力向上に向けての児童の課題	改善のための取組	追加する取組等（12月）	年度末の取組評価（2月）
1	国語	<p>学 字形に気を付け、丁寧に書こうとしている児童が多くいる。一方、ひらがなを書く際に、誤りや文字の書き方が違っている児童が見られ、十分に身に付いていない。</p> <p>学 物語文の読み取りでは、想像した登場人物の様子を音読に生かそうとする姿が見られる。一方、考えた理由を説明するのが難しいと感じている児童もあり、根拠となる言葉や文を探す力が十分に身に付いていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 丁寧に文字を書こうという意欲をもとに、止め・はね・はらいなどのポイントに気を付けて書くことについて、手本を見せながら指導を行う必要がある。 言葉で発したものを文字にすることができるように、音と文字とを結び付けて理解できるよう指導をする必要がある。 考えた理由にあたる部分がどこであるかを読み取る力を高める必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業では、板書や教科書の視写に取り組みさせる。また、家庭学習では、なぞり書きや手本を見ながら書く活動に取り組みさせる。それらを通して、字形を整えて書くことができるようにする。 聴写に取り組みさせ、聞いた音を文字にする取組を行う。それにより、音と文字とを一致させて理解できるようにする。 誰が、どこで、どのようなことをしていたという場面の様子を読み取ることができるように、誰が、どこで、どのようなことをしていたという視点を児童が理解できるように指導する。また、考えを発表する時には本文の「どこに」「どのように」書いてあったかを問いかけ、理由をもつことを習慣付ける。 気持ちや様子を表す言葉を児童に想起させたり、児童に紹介したりすることで、登場人物の様子を豊かに想像することができるようにする。 		
	算数	<p>学 10までの数についての理解は概ねできている。</p> <p>学 10以内の加減計算については、指を使ったり具体物を使ったりして計算する様子が見られる。</p> <p>学 文章問題を読んで加法か減法かを判断して立式する力や、問いに正対した答え方をする力が、十分に身に付いていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 10までの数についての理解ができているので、2つの大小を判断したり、正しい順序で並べたりする力を高めていく。 加減計算の問題について計算を素早く、正確にできるようにしていく必要がある。 文章問題に取り組みさせる際には、ブロック等の具体物を示し、操作させながら加法か減法かの場面を理解させる必要がある。また、問題文を読み取り、どのような答え方をすればよいかをできるようにする必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 2つの数を比べる問題や、数字の順番を答える問題等、様々な問題に取り組みさせることで、数の大小や順序の理解を深める。 家庭学習を通して、既習事項に取り組みさせることで、計算に慣れさせたり理解を定着させたりする。また、授業ではデジタル教科書や実物投影機で絵や具体物を映し出すことで、理解しやすくする。 問題文を読む際に、数が増えたのか減ったのかに着目させる発問をする。また、「みんなで」「合わせて」、「のこりは」「ちがいは」などの言葉に着目させることで、加減の場面を理解させ、立式及び計算をさせる。答えを書く際には、問題の終末部分に着目させることで、単位やどちらがどれだけ多いかなどの答え方ができるようにする。 		
2	国語	<p>学 漢字やカタカナを正しく書いたり読んだりすることが概ねできている。だが、学習した漢字を積極的に使わない児童が多い。</p> <p>学 文を書くことに抵抗感をもつ児童が多い。</p> <p>学 自分の思いや考えを表現することが苦手な児童が多い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 日頃から習った漢字を使うことを意識させる必要がある。 短文なら書けるが、長文を書くときに順序立てて書けなかったり、自分の考えや経験を結び付けて書くことができなかったりする児童が多い。 自分の思いや考えを表現する時に「なぜ」「どうして」が問われれば表現できるが、自発的には出てこない。 	<ul style="list-style-type: none"> 漢字の定着を図るために、ベーシックタイム（短時間学習）や家庭学習の充実を図る。小テストやワークテストを実施し、習った漢字が身に付いたか確認できるようにする。得点表にテストを貼り、意欲付けをする。 週末日記の取組を行う。観察記録文を書かせる時や自分の思いや考え書く時に、5W1Hを意識して表現できるようにする。個で活動したことをペアで見合ったり全体で確認したりできるよう指導する。 話す時や書く時の型を示す。「はじめ」「中」「おわり」の構成を繰り返し指導し、国語以外の授業でも生かせるようにする。 		

	算数	<p>学 繰り上がり繰り下がりのある計算を正しく解く力が概ね身に付いている。筆算は手順を忘れていたり、ケアレスミスが目立ったりしている。</p> <p>学 文章問題を読んで内容を正しく理解できずに正答できない児童が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時間が経つと筆算の手順を忘れてしまったり、加法・減法が混合してしまったりする。 ・数字の書き方が雑だったりマスの使い方が間違っていたりすることによる誤答が多く見られる。 ・文章に下線を引き、内容を確認する習慣を付ける指導をした結果、概ね正しく問題を捉えられるようになってきた。だが、声掛けはまだ必要であり、繰り返し指導していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容のプリントや計算ドリルを活用し、ベーシックタイム(短時間学習)や家庭学習で繰り返し取り組めるようにして定着を図る。 ・タブレット PC を用いて学習コンテンツを活用し、学校でも家庭でも習熟を図れるようにする。 ・ICT 機器を活用し、ノート指導を徹底させる。マスの使い方、定規を使う、繰り上がり繰り下がりのときに必ず数字を書くなど、手順を定着させる。 ・デジタル教科書を活用し、動画を活用してイメージをもたせたり、キーワードとなる語や文に下線を引いたりして理解を促す。 		
3	国語	<p>調 「書くこと」について、区及び全国の平均正答率を下回っている。</p> <p>調 言語についての知識・理解・技能において、区及び全国の平均正答率を下回っている。</p> <p>学 5W1H を意識して話したり聞いたりできる児童が多いが、つながりに着目して話したり、話の要点を聞き取ったりできる児童は少ない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「はじめ」「中」「おわり」の構成を意識して書くことが苦手な児童が多い。 ・漢字の読み書きについては、個人差が大きい。また、漢字の筆順を正しく理解できていない児童が多い。 ・接続詞を用いて話したり、大事なところを落とさずに聞いたりすることが苦手な児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の振り返りを書く場を設ける。教師の価値付けにより、書くことに慣れさせるとともに、有用感を高める。 ・ベーシックタイム(短時間学習)で漢字の学習で ICT 機器を活用し、筆順、部首などを視覚的に捉えさせ、定着を図る。また、家庭学習での練習方法も指導して、取り組ませていく。定期的に漢字テストを実施して定着させ、個別指導に生かす。 ・大事なことを落とさないように聞くために、よい話し方やよい聞き方についての話型や聴型を示し、指導する。 		
	算数	<p>調 「1000までの数」について、区及び全国の平均正答率を下回っている。</p> <p>調 「かけ算」について、区及び全国の平均正答率を下回っている。</p> <p>学 計算問題を早く解けるようになってきた児童が多いが、個人差が大きい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1000までの数を数直線に表したり、不等号を用いて大小を比較したりすることが苦手な児童が多い。 ・かけ算を適用して文章問題を解くことが苦手な児童が多い。 ・繰り上がりのあるたし算や繰り下がりのあるひき算の問題を解くことが苦手な児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数量関係の学習においては、ICT 機器を活用し、児童に視覚的に捉えさせることで概念の定着を図っていく。特に、数直線により大きさを実感させる。 ・文章題については、ICT 機器を活用して文章題のイメージ化を図り、何を問われているのかを理解させて、立式させ、文意を確実に捉えられるようにする。 ・日常的に四則計算の練習に取り組みせて、計算力の向上を図る。 		
4	国語	<p>調 全国正答率を上回っているが、第2学年の配当漢字を書くことが身に付いていない。</p> <p>調 「言葉の学習」では、漢字の部首について目標値を上回っているが、国語辞典の使い方の理解が十分ではない。</p> <p>調 2段階構成の作文や中心を明確にして文章を書くことについては目標値を上回っているが、指定された長さで文章を書くことに課題がある。</p> <p>学 第3学年の漢字については、定着している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第1学年、第2学年配当の漢字について、正しく読むことや書くことに課題がある。文章に取り入れて書くことができない。 ・五十音の順番について理解していない児童がいるため、国語辞典の使い方に課題が見られる。 ・「書くこと」について、苦手意識は少なくなってきたが、指定された長さで書くことができない。 ・繰り返し指導しないと既習の漢字を忘れてしまうので、自分で学習できるような手だてが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を書くことへの苦手意識を減らすために、年間を通じて、作文を書く時間を設ける。また、日記などを書く機会を設ける。 ・「書く」の単元では、構成メモを用いて、順序を捉えて書くことを指導する。 ・新出漢字の習熟には、国語辞典を活用するようにする。 ・文章を読む際に、場面分けを学級全体で行う。また、登場人物の確認や情景を全体で確認することで、話のまとまりが変化したこと全児童が気付けるようにする。その際、一人で考える時間、友達の意見を聞いて考えを広げたり深めたりする時間を設け、対話的な学習の充実を図る。 		
	算数	<p>調 「わり算」の2桁÷1桁=1桁(余りあり)の計算については、目標値を下回っている。また、余りの処理に気を付けて答えを求めることについても目標値を下回っている。</p> <p>調 「1000より大きい数」については目標値を上回っているが、数の相対的な大きさの理解については目標値を下回っている。</p> <p>学 計算について苦手意識をもっている児童が、計算に意欲的に取り組むようになった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・かけ算の習得に課題がある児童が多いため、わり算についても計算を誤ったり、余りを書き忘れたりする児童が多い。 ・ある数を、単位に着目してそのいくつ分と見る方法や、数の仕組みについて理解していない児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習などで、既習内容の復習に取り組み、基礎的・基本的な学力の定着を図る。 ・四則計算を毎回の授業で取り組むことで、計算力の向上を図る。 ・大きな数の概念を定着させるために、単位の書き込みや4ケタの区切り線を書かせ、考えさせる。 ・年間を通じて具体物や ICT 機器を効果的に活用し、長さやかさについて量感を実感させ、定着を図る。 		

5	国語	<p>調「書くこと」について、正答率は上がっているが、「2段落構成で文章を書くことができる」に関して、目標値に達していない。</p> <p>学学習感想や日記等、文章を書くことに昨年度から取り組んだことで、書くことへの苦手意識が少ない。</p> <p>学発表する機会を設けたことで、聞き手に分かりやすく伝えようとする意識が育っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめ・中・終わりの構成を考えながら書くことや、読み手に伝わりやすくするために順番に気を付けて書くことに課題が見られる。 ・漢字がもつ意味を理解していないため、同音異義の漢字と間違える児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「書くこと」では、構成メモや短冊等を用いることで、文章構成を視覚的に捉えさせ、順序を意識して書くことができるようにする。 ・自分の考えや学習感想を書く活動を取り入れることで、文章を書く機会を増やす。 ・新出漢字を学ぶ際、自分で文章をつくる学習を設け、漢字のもつ意味を捉えられるようにする。 ・読書活動などを充実させ、語彙を増やし、言語感覚を磨く。 ・文章を読む際に、文章の構成を理解する時間を設ける。また、接続語に注目させることで、一人一人の力で段落の内容を捉えられるようにする。 		
	算数	<p>調「数と計算」において、目標値を超えているが、「2けた÷1けた=2けた(余りなし)」は、目標値に達していない。</p> <p>調「分度器の中に示された角の読み取り」において、目標値に達していない。</p> <p>学基本的な四則計算が身に付いていない児童が多い。</p> <p>学定規や分度器等の操作において課題のある児童が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・わり算のように、2つ以上(わり算・ひき算)の手順を行う計算に課題が見られる。 ・コンパスや分度器を用いた作図等に課題が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京ベーシック・ドリルやeライブラリ等のデジタル教材、既習内容の復習に取り組みせ、基礎的・基本的は学力の定着を図る。 ・見直しをする時間を確保することで、自ら気付き、正しい答えを導き出せるよう習慣付ける。 ・ノート指導の際に定規を使う機会を設けたり、デジタル教科書やICT機器を活用し分度器やコンパスの使い方を視覚的に身に付けさせたりすることで、作図をする力を高める。 		
6	国語	<p>調「条件に合わせて文章を書くこと」と「活用の思考力・判断力に関する問題」が、目標値に達していない。</p> <p>学目的や意図に応じて、考えなどを話す、聞く能力、また、内容や要旨をとらえながら読む能力が高い児童が多い。</p> <p>学目的や意図に応じた文章の構成の効果を考えて文章を書くことを苦手とする児童が多い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な文章の構成を考えることはできるが、効果的な構成や表現を書くことに課題がある。 ・事実と感想、意見などを区別したり、図表などを効果的に引用したりして考えることが苦手な児童が多い。 ・語感や言葉の使い方に関する意識が低い児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章中の指示語や接続詞、比喩を読み取り、また、事実と感想を区別できるような板書をする中で、文章の構成を理解させていく。 ・新聞やポスター作りなど他教科でも活用できる内容を設定し、効果的に引用したり考えられたりしているものを全児童に広げていく。 ・言葉の例文を考えさせて使い方の理解を深める。 		
	算数	<p>調数と計算「約数と倍数」と量と測定「単位量当たりの大きさ」が目標値に達していない。</p> <p>調小数のかけ算・わり算の知識・理解が、平均より下回っている。</p> <p>学基本的な図形の測定や作図、計算の能力が高い児童が多いが、活用する問題を解くことが苦手である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・算数的活動を通して、整数の見方、数についての感覚や計算の意味の理解などを高める必要がある。 ・小数のかけ算とわり算、分数の約分や通分などで、手順が複雑になると簡単な計算を間違える児童が多く、正確に計算することに課題がある。 ・自分の考えを表現することが苦手と感じている児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜその式になるのかを数直線等を用いて、式の意味を考えさせ、ICT機器を活用し、自分の言葉で伝える場を設ける。 ・複雑な計算では途中の式を書かせることを徹底することと見直しをする時間をとらせることで正確に答えを導き出す力を身に付けさせる。 ・自分の考えを書く際に、一つの方法に限らず、言葉や図や数直線など複数の方法で表現してよいことを指導し、対話的な学習の定着を図る。 ・東京ベーシック・ドリルやeライブラリ等のデジタル教材を活用し、基礎的・基本的は学力の定着を図る。 		
音楽	<p>学学習への意欲が高く、特に歌唱への興味・関心が高い。高学年は違うパートを歌い合わせる喜びを感じている。ただ歌詞や楽譜の内容からどのように歌いたいかについて思いをもつ児童は多くない。</p> <p>学リコーダーの運指について、フラットやシャープになると困難になる児童が各学級に数名いる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の内容や楽譜に書かれている情報に細かく注視しない。 ・左手のみの動作は難なくできるが、右手が加わったりフラットやシャープが入ったりする、運指が難しくなる児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を活用し、歌詞の内容や楽譜に書かれた情報を全体で共有し、どのように演奏したいかについて常に意識できるようにする。 ・常時活動にリコーダーのフラットやシャープのある曲を取り入れ、定着を図る。特に苦手意識の高い児童には、個別にスモールステップのゴールを設定し、「できる・できた」の実感をもつことを重ねて自信をつけていく。 			
図工	<p>学豊かな発想をする児童が多いが、なかなかイメージが浮かばない児童もいる。</p> <p>学イメージをもつことはできるが、どのように表したらよいか分からない児童がいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の様々な体験を作品づくりに生かすことができていない児童がいる。 ・はさみやのこぎりなどの切る道具や絵の具やクレヨン等の描画の道具を、自分の思い通りに使えない児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の幅を広げるために様々な作例をICT機器を活用して示し、いろいろな技法を習得できるようにする。 ・既習の道具の使い方を授業の初めに使い方の確認をしたり思い出したりするための時間を設け、繰り返し取り組むことで操作がスムーズにできるようにする。 			

特支					
----	--	--	--	--	--

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況

※分量は2ページ以上となってもよい。